

# きぼうのいえ ニューズレター



## 2019年 号外

認定特定非営利活動法人 きぼうのいえ  
〒111-0022 東京都台東区清川2丁目29番12号

電話：03-3875-7523 Fax：03-3875-7525  
E-Mail：kibounoie777@mbr.nifty.com  
ホームページ：http://www.kibounoie.info



暑中お見舞い申し上げます

天候不順な時を過ごし、暑い夏を迎えました。みなさまが、希望をもって日々の生活を送ることが出来ますよう、祈念いたします。

いつも、きぼうのいえを覚えて、お祈りとお支えをいただいておりますこと、心よりお礼申し上げます。

さて、きぼうのいえでは、ゆかりの人がともに安らぐ場所として、長野県伊那市に墓地を用意して逝去された方々の埋葬をしています。毎年のように、日を定めてスタッフ数人が遺骨を持参し、埋葬とお参りを続けてきました。しかし、遠方のため、親しくしていた友人知人がお参りに向うことはとても困難でした。きぼうのいえに近く、入居されている方がお参りに行くことができる場所があったら・・・という声は、長年寄せられていたところです。

この度、きぼうのいえの近く、清川にある浄土宗のお寺・光照院の墓所に、きぼうのいえのお墓を移すことができるのではと話題になり、相談をしましたところ、希望の通りお引き受けくださいました。

かつてきぼうのいえの墓地が整った時、「これで墓のない（はかない）生活から卒業だ」とか「行くあてが定まって、永遠にホームレスではなくなった」などと言いあって、喜びを分かち合いました。ここでさらに「遠くに行かなくても、いつでも会える」と、皆で実感することができると思います。

人にとって、忘れ去られることが最大の悲しみだと言われることがあります。しかし、きぼうのいえは、だれから忘れられても、決してわたしたち一人ひとりの存在を忘れない方がいることを覚えながら、そしてそこに暮らす一人ひとりの生活を、仲間として支え合い、これからも大切にしていきたいと思います。

「女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。  
母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。  
たとえ、女たちが忘れようとも  
わたしがあなたを忘れることは決してない。

見よ、わたしはあなたを

わたしの手のひらに刻み付ける（旧約聖書・イザヤ書 49章 15節）」

わたしたちにとってお墓は、忘れない、忘れられないことのささやかなるしであり続けるでしょう。そしてそれが、ライフ＝一人ひとりの人生、一つひとつのいのちが大切にされているということの証拠ともなりますように願っています。

みなさまのご協力に重ねてお礼を申し上げますとともに、きぼうのいえの墓地の移設のことをよい知らせとしてお伝えできますこと、心より感謝いたします。



2019年 夏  
認定NPO法人 きぼうのいえ  
理事長 下条裕章

## お墓のお引越し



曹洞宗の尼僧が一人。彼女はスタッフ。「なむからたんのーとらやーやー」。仕事に就く前に礼拝堂で力強く読経。浄土真宗の尼僧も一人。彼女もスタッフ。「きみょうむりょうじゅにょら〜い」と、ご葬儀の時は美しい声で唱えてくれる。讚美歌あり、読経あり。きぼうのいえは敬虔なクリスチャンも仏教徒も、皆亡くなった友人のもとに集まる。

見学者が礼拝堂にいらした時は十字架あり、木魚ありで「ここはバリアフリーです」と案内する。みんなの心が、亡くなった友には通じるからなんでもあり。こんな間柄だからみんな側にいてほしい。

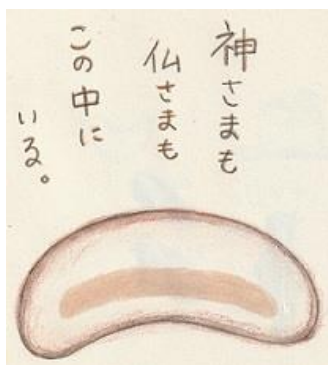
長野は遠い。今も礼拝堂には10体近くのご遺骨が安置されている。長野のやすらぎ霊園を終の棲家にしたみんなも、思い切って私たちの側に帰ってきてほしい。みんな山谷が好きだった。頑張っている私たちを側で応援してほしい。私たちも時々会いに行けるから……。

長野のお墓をきぼうのいえの地元に戻す提案を、先日の総会で諮りました。異議はなく、満場一致で承認されました。その旨を長野のやすらぎ霊園に伝え、近くの光照院さんにも相談をしております。

現在きぼうのいえで見送った方は198人。スタッフも入居者も、力を合わせて精一杯生きているけれど、弱音を吐きたくなったら彼らに会いに行こう！きっと応援してくれるから。

長野県伊那市の上島やすらぎ霊園から、同じ町内にある浄土宗光照院へのお墓の移転について、皆様のご理解を心からお願い申し上げます。

(事務局長 藤堂千浪)



## あんパンの中にも…… (Nさん)

「あんパンが食べたい！」Nさんの再三の希望に応じて用意した。のど詰まりが心配なので、ここはつぶあんではなくこしあんをセレクト。半分に切って差し出す。さすが100円のパン。あんこがいっぱいつままっているとはいかぬ。切り口はぽっかり空いた洞窟のよう。Nさんはしばしその空洞の底にへばりついている白いあんこを眺め、「ああ」とため息。さては期待はずれだったか。おもむろにかぶりつくNさん。見守る私たち。一口目をゆっくりとお茶で流し込み、「ああ」とまたため息。手にしたあんパンを見つめて何か言いたげ。もはや、のどが詰まることよりも、あんパンの感想が気になる私たち。Nさんは唱えるようにのたまうた。「神様も〜、仏様も〜、この中にいる〜。」

## インドの神様も…… (Kちゃん)

Kちゃんの右足にはガネーシャがいる。聞くと、「ぼくの守り神なの。」入れ墨の説明をしてくれた。そんなKちゃん、実は筋金入りの寂しがり屋さん。なかなか部屋でひとりでは過ごせない。ナースコールはほぼ連打。人恋しくて、歩きだしては転んだり、目が離せない。これはもう、なにか気晴らしが必要だ。メモ紙でも作ってもらおうか？ウエス作りはどうだろう？ハサミは危ない？ そうだ、ぬりえはどうだ！？「塗ってみたい」との返事にさっそく提供。しかし、絵柄を見るなり「これは子供だました」とあっさり却下。どうやら単純な花や動物では物足りないらしい。それならば……と、「ぼくの守り神」にご登場願うことになった。これが大当たり！ガネーシャの絵を前にして色鉛筆を手にとると、ものすごい集中力で取り組み始めた。もはや我々スタッフなど眼中にない。その色づかいは力強く、感動的である。もくもくと楽しんでいる姿にも感動。ガネーシャに勇気を得て、シヴァ、ヴィシュヌ、ケララ……あまり馴染みのない神様たちも続々とプリントアウトされて登場。いまやKちゃんの右足を中心に、カラフルに塗られたインドの神様たちが、きぼうのいえで踊っている。(R)



**ホームページをぜひご覧ください。**